

自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善に関する研究

—1人とペアでは映像視聴の際にどのような違いが生じるか—

小林 輝美^{1, 2}

¹ 教育テスト研究センター ² 杏林大学外国語学部

本研究では英語によるプレゼンテーションを改善するには自分自身を録画した映像を視聴することが有効であると考え、プレゼンテーションを録画した映像を視聴する際、1人で視聴することとペアで視聴することを比較した。ペアで視聴した方がより多くの項目について自己評価が高くなり、準備、自信、流暢さについてより高く自己評価することから、ペアで視聴することで準備が必要な点が明確となり、その結果、適切に準備をすることができ、流暢で自信を持って発表できるようになったのではないかと考えられる。プレゼンテーションを改善した場合は、自分だけではなく、他者の視点、評価を取り入れることが重要であると考えられる。

キーワード：プレゼンテーション、映像、自己モデリング、自己評価、相互評価

1. はじめに

学校、ビジネス、いずれの場においてもプレゼンテーションを実施する機会はある。プレゼンテーションを改善するために、プレゼンテーションの様子をビデオ撮影するという方法が考えられる。プレゼンテーションを以前はビデオカメラを用いて撮影したものが、今日ではスマートフォンやタブレット PCなどで簡単に撮影できるようになった。撮影した映像を視聴する際に期待される効果にモデリング(Bandura, 1969)がある。モデリングとは社会的学習理論の一部であり、他人の様子を見ることで学習することができるという理論である。メディアの発達につれ、映像を通じてもモデリングが可能となった。さらに、映像を利用することで他人だけでなく自分自身をモデリングする自己モデリング(Dowrick, 1983)も可能である。

また、どのように映像を視聴するかも考慮しなければならない。自分一人で視聴する際に行う自己評価と学習者同士のペアやグループ、または指導者と共に視聴して行う相互評価は過程や結果が異なるだろう。自己評価では自身の欠点を直視しない学習者が存在する(藤原, 2007a)。相互評価では相手も自分を評価する場合、そうでない場合に比べて相手に高い評価値をつける場合があり、教員の評価と比較すると、評価する相手に評価されない場合の方がより適正である(藤原, 2007b)といった問題点もある。しかしながら、ビデオオンデマンドとウェブデータベースを利用した相互・自己評価システムを用いたプレゼンテーションの授業で、学習者の意欲が向上した(布施ら, 2002)という利点もある。

2. 目的

ペアで視聴する方が1人で視聴するよりも多くのことに気づき、プレゼンテーションが改善されるだろうと仮説を立て、プレゼンテーションを撮影したビデオを1人で視聴するのが良いか、ペアで見ながら話し合うのが良いのかを検証する。

3. 方法

3.1 実験デザイン

東京都内の大学に所属する学生 60名(男性 30名、女性 30名)に英語でプレゼンテー

ションを行ってもらった。最初に自己紹介をするプレゼンテーションの簡単なテンプレートを配布し、原稿を作成させた。次に、プレゼンテーションを評価するためのチェックシートを提示し、原稿を暗記することが望ましいと伝えた上で、プレゼンテーションの準備をしてもらった。その後、ペアになり、お互いのプレゼンテーションをタブレット PC で練習のプレゼンテーションと本番のプレゼンテーションの 2 回撮影した。被験者には 1 人につき 1 台のタブレット PC (Microsoft Surface pro 3、Windows 8) とイヤホンが与えられた。撮影した映像視聴後、自分 1 人で視聴するのとペアで視聴するのとの違いを調べるために、1 人で視聴する群 (男女各 15 名) とペアで視聴する群 (男女各 15 名) に分けた。

プレゼンテーションの準備をした後、練習用のプレゼンテーションとしてビデオ撮影をした。そのビデオを 1 人、またはペアで視聴後、自分でチェックシートを用いてプレゼンテーションを評価した。再度準備を行い、本番用のプレゼンテーションとしてビデオ撮影をした。そのビデオを視聴後、1 人またはペアで視聴後、自分でチェックシートを用いてプレゼンテーションを評価した。

3.2 調査内容

練習時と本番時のプレゼンテーションのビデオについて 18 項目の質問を用意し、5 段階で回答してもらった。(1. まったくそう思わない、2. あまりそう思わない、3. どちらとも言えない、4. 少しそう思う、5. 非常にそう思う)

4. 結果

まず、練習と本番のプレゼンテーションの評価を比較するために、SPSS Version 22 を用いて対応ありの t 検定(5%水準)を行った。次に、1 人で視聴した時とペアで視聴した時の評価を比較するために、対応なしの t 検定(5%水準)を行った。

1 人で視聴した群は練習時と本番で「よく準備をした。」、「暗記できた。」、「自信を持って発表できた。」、「快適だった。」、「表情が適切だった。」、「姿勢が良かった。」、「声の大きさが適切だった。」、「声のはっきりしていた。」、「間が適切だった。」、「全体的に見て、適切なプレゼンテーションだった。」の 10 項目で有意差があった。

ペアで視聴した群は練習時と本番で「よく準備をした。」、「暗記できた。」、「自信を持って発表できた。」、「快適だった。」、「アイコンタクトを取ることができた。」、「ジェスチャーが適切だった。」、「表情が適切だった。」、「声の大きさが適切だった。」、「声のはっきりしていた。」、「流暢だった。」、「発音が適切だった。(カタカナ英語ではなかった。）」、「トーンが適切だった。」、「間が適切だった。」、「全体的に見て、適切なプレゼンテーションだった。」の 14 項目で有意差があった。

1 人で視聴する群とペアで視聴する群との比較では、「よく準備をした。」、「自信を持って発表できた。」、「流暢だった。」の 3 項目で有意差があった。

5. 考察

項目数から見ると、ペアで視聴した群の方が自己評価が高い項目が多かったことから、ペアで視聴する方が自己評価が高くなることがわかる。内容としては 1 人で視聴した群は「姿勢が良かった。」という外観を高く評価した一方、ペアで視聴した群は「アイコンタクトを取ることができた。」、「ジェスチャーが適切だった。」、「流暢だった。」、「発音が適切だった。(カタカナ英語ではなかった。）」、「トーンが適切だった。」のように外観が 2 項目に対し、プレゼンテーションについて 3 項目で高く評価したことから、ペアで視聴した方がプレゼンテーションが改善したと感じていたと思われる。

両群を比較し、ペアで視聴した方が自己評価が高くなった項目が「よく準備をした。」、「自信を持って発表できた。」、「流暢だった。」ことを考えると、ペアで視聴することで準備が必要な点が明確となり、その結果、適切に準備をすることができ、流暢で自信を持って発表できるようになったのではないかと考えられる。藤原(2007b)のようにパートナーから高い評価を得たことでそれが自信となり、自己評価も高くなったのかもしれない。

6. まとめ

本研究ではプレゼンテーションを録画した映像を視聴する際、1人で視聴することとペアで視聴することを比較した。ペアで視聴した方がより多くの項目について自己評価が高くなり、準備、自信、流暢さについてより高く自己評価することから、ペアで視聴することで準備が必要な点が明確となり、その結果、適切に準備をすることができ、流暢で自信を持って発表できるようになったのではないかと考えられる。プレゼンテーションを改善したい場合は、自分だけではなく、他者の視点、評価を取り入れることが重要であると考えられる。

参考文献

- Bandura, A. J. (1969) *Principles of behavior modification*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Dowrick, P. (1983). Self-modeling. In Dowrick, P., & Biggs, S. (Eds.), *Using video: Psychological and social applications*. Wiley Interscience, New York.
- 藤原康宏, 大西 仁, 加藤 浩 (2007a), 学習者間の相互評価に関する研究の動向と課題, *メディア教育研究*, 4 (1) pp. 77-85.
- 藤原康宏, 大西 仁, 加藤 浩 (2007b), 公平な相互評価のための評価支援システムの開発と評価—学習成果物を相互評価する場合に評価者の選択で生じる「お互い様効果」—, *日本教育工学会論文誌*, 31 (2) pp. 125-134.
- 布施雅彦, 湊 淳, 小澤 哲 (2002), ビデオオンデマンドとウェブデータベースを利用した相互・自己評価システムの開発—高専における問題解決学習の事例—, *教育システム情報学会誌*, 19 (4) pp. 206-211.